

とうきょう すくわくプログラム活動報告書

舟渡保育園
0歳児クラス

1. 活動のテーマ

<テーマ>

光

<テーマの設定理由>

部屋に光が差し込んだときに、光に向かって手を伸ばしたり、自分の影に触れようとしたりする子どもたちの姿が見られた。

光をテーマにすることで、子どもたちの興味や関心をさらに深く知っていきたいと思った。

2. 活動スケジュール

- 7月 アクリル積み木に触れる
- 8月 セロハンの装飾を窓に貼る
アクリル積み木を光に当てる
カップに水を入れて光に当てる
- 9月 セロハンを窓に貼る
ケミカルライトを使用する
アクリル積み木やセンサーボトルに光を当てる
戸外の日が当たる場所に水を入れたたらいやカップを置く
懐中電灯で遊ぶ。
- 10月 花紙を散らしライトを当ててみる。
- 11月 トレース台を使って遊ぶ。
- 1月 戸外でカラーセロハンや色水を使って遊ぶ

3. 活動のために準備した素材や道具、環境の設定

光が差し込む窓際にアクリル積み木を配置し、窓にはカラーセロハンを貼って、光を通して色や影が映り込むよう工夫した。

また、室内を暗くして懐中電灯やケミカルライトを使い、光と影の変化を観察できる環境を整えた。

戸外では、カラーセロハンや色水を持ち出して、自然光の中での光の変化を楽しめるように

した。

準備したもの

アクリル積み木／カラーセロハン／センサーボトル／トレース台／懐中電灯／スマートフォンのライト／テーブルライト／ケミカルライト／画用紙を貼ったテープの芯／玩具／透明カップ／たらい／色水

4. 探究活動の実践

<活動の内容>

室内では、アクリル積み木やカラーセロハンを窓際に貼り、光が差し込むことで生まれる色や影の変化を観察した。ライトと組み合わせることで、光の映り方や色の重なりを確認した。部屋を暗くし、懐中電灯などのライトを使って、手や玩具の影を映したり、光の広がりを視覚的に捉えた。トレース台やセンサーボトル、ペットボトルなども取り入れ、光の透過や屈折の変化を試した。

水遊びでは、透明カップやたらいを日向に置き、水と光が交わることで生まれる揺らぎや反射を観察した。

戸外では、カラーセロハンや色水を使い、景色や地面への映り込みを通して、自然光による変化を比較・確認した。

<活動中の子供の姿・声、子供同士や保育者との関わり>

光や色、水の変化に興味をもち、手で触れたりじっくり観察したりしながら、さまざまな感覚を楽しむ姿があった。光の映り込みや影に気づくと、指差したり声を上げて反応したり、触れようとする様子が見られた。保育者の動作を真似しながら遊びに取り入れたり、気づいたことを言葉で伝えようとする姿もあった。懐中電灯やスマホのライトを使った遊びでは、光の大きさや色の変化を発見し、友だちと一緒に試す姿があった。





5. 振り返り

<振り返りによって得た先生の気づき>

子どもたちは光や影、色の変化に強い関心を持ち、触れたり観察したりしながら、新しい発見を重ねていた。保育者の動きを真似することで遊びが広がり、自分なりに試したり工夫したりする姿も見られた。光を使った遊びの中では、一人ひとりの気づきや表現の仕方に違いがあり、その多様さを改めて感じた。影の仕組みを理解し始める子、光の大きさや色の変化に気づく子もいて、自由な発想から新しい遊びが生まれる場面もあった。こうした経験を通して、保育者の関わり方や環境の工夫が、子どもの興味をさらに引き出し、発見へとつながっていくことを実感した。

とうきょう すくわくプログラム活動報告書

舟渡保育園
3歳児クラス

1. 活動のテーマ

<テーマ>

自然

<テーマの設定理由>

春から虫探しや植物探し、木の実集めなどを通して、子どもたちは多くの自然に親しんできた。自然に触れる中で、子どもたちの中に「もっと探したい」「もっと知りたい」という気持ちが芽生えていたため、このテーマを設定することにした。園の近くに公園があることで、多くの自然と関わることができたことも背景にある。

2. 活動スケジュール

- ①【発見】散歩中に見つけたものを保育者に伝え、写真やメモで記録する。
- ②【振り返り】翌日には、前日に見つけたものを実物や写真、プロジェクターなどを使って、みんなで振り返りながら共有する。
- ③【次回へのつながり】子どもたちの発言や関心から、次の活動の内容を考える。
- ④【共有と振り返り】活動の様子をブログで保護者に発信し、保育者間でも振り返りを行い、今後の活動につなげる。
- ⑤【実践】子どもたちの気づきや声をもとに、実際の活動を展開する。

3. 活動のために準備した素材や道具、環境の設定

・プロジェクター、模造紙、カメラ

散歩で見つけたものを記録し、写真をプロジェクターで投影。その後、模造紙に写真を貼って壁に掲示し、みんなで共有できるようにした。

・ビニール袋、マジックペン、シール

風揚げ遊びに向けて、子どもたちが自分で風を製作できるように用意した。

・サーキュレーター

室内でも風を揚げて楽しめるように設置した。

・造形ワゴン

木の実や葉、枝などを使って自由に製作活動ができるよう、工作の材料を自由に取り出せる造形ワゴンを設置した。子どもたちは見つけた自然物を使って、思い思いの作品づくりを楽しんでいた。

4. 探究活動の実践

<活動の内容>

・散歩に出かけた際、子どもたちの水筒にビニール袋を結びつけ、歩きながら自然物を見つけて集める活動を行った。見つけたものは保育者や友だちと知らせ合いながら拾い集め、保育者はその様子を記録していった。

園に戻ってからは、拾ってきた木の実や葉などの実物をプロジェクターで大きく映して観察したり、実際に触れてみたりして、発見したものの振り返りを行った。子どもたちからは「次はこんなものを見つけないか」「こんなものも集めてみたい」といった声があがり、次回の活動へとつながっていった。さらに、集めた自然物を使って自由に製作できるように造形ワゴンを活用し、子どもたちが思い思いに作品づくりを楽しむ姿も見られた。材料を自ら選び、工夫しながら表現することで、自然への関心や創造力がより深まっていった。

また、凧揚げの活動を通して風への関心が高まり、「どこから風が吹いているの?」といった発言もあった。子どもたちの興味を広げるために、室内ではサーキュレーターを使用し、屋外では風の強い日に保育者が先に出て風の様子を確認するなど、さまざまな場面で凧揚げを楽しんだ。

<活動中の子供の姿・声、子供同士や保育者との関わり>

【散歩中】

子どもたちは自然に興味津々で、見つけたものを次々と保育者や友だちに伝え合っていた。

子①「先生、ちょうちよいたよ」

保育者「何ていう名前の蝶々かな?」

子①「しじみちょう」

子②「アゲハ蝶みたい」

子③「ちょうちよ白いね」

——発見したもののひとつをきっかけに、子どもたち同士で意見を交わしながら楽しむ姿が見られた。

【プロジェクターで木の実を投影して】

保育者「これは何を見つけたのか教えてくれる?」

子①「ゴリラの実」

子②「緑のぶどう」

子③「ブルーベリー」

保育者「それぞれ違う物に見えたんだね」

子④「割ってみたら中から種が出てきたよ」

子⑤「僕も見してみたいな」

保育者「じゃあ次は木の実の中をみんなで見てみようか」
——見立てや発見を楽しみながら、次の活動へとつながるやりとりが自然に生まれていた。

【室内での凧あげ遊び】

子①「(凧が上がらないのを見て)飛ばないねえ」

子②「風がないからじゃない？」

保育者「どうやったら風が吹くのかな？」

子③「扇風機を使ってみたらいいんじゃない？」

サーキュレーターを1つ用意してみたが、風が弱く凧があまり上がらなかった。すると子どもから、「2つにしてみよう!」「3つでやってみたら?」と提案があり、数を増やしていくと凧が上がるように。

凧がふわっと舞い上がった瞬間、「やったー!」と大喜びする姿が見られた。



5. 振り返り

<振り返りによって得た先生の気づき>

子どもたちが日常の中でさまざまな発見をしていることに、改めて耳を傾けることで気づきを深めることができた。同じものを見ていても、一人ひとりの考え方や捉え方が全く異なることを強く感じた。子どもたちの発想はとてもユニークで、大人には思いつかないような意見やアイデアを出してくれるため、その可能性の無限さを改めて実感した。

とうきょう すくわくプログラム活動報告書

舟渡保育園
5歳児クラス

1. 活動のテーマ

<テーマ>

積み木

<テーマの設定理由>

部屋にある長方形の積み木で、子どもたちは多様な形のタワー作りやドミノ遊び、ビー玉転がしのルート作り、街づくりなど、それぞれの自由な発想で様々な世界を楽しんでいた。その姿に注目し、想像力がさらに膨らむよう新たな積み木や他の素材を組み合わせながら、少人数で協力して作り上げる経験を深めていきたいと考えた。積み木遊びの中で生まれる子どもたちの「こうしたい」「ああしたい」という小さなつぶやきや面白い発想を、より一層大切にしていきたい。

2. 活動スケジュール

《夏～秋》

白木の積み木を使い、規則性のあるタワー作りやビー玉転がし、街作りなどを行った。

《冬》

木製造形ブロックやアクリル積み木、アーチ型の積み木など多様な素材を取り入れ、より発想豊かにタワー作りやビー玉転がし、街作りに取り組んだ。

3. 活動のために準備した素材や道具、環境の設定

積み木遊びを中心に行いながらも、子どもたちがより自由に創造的な表現を楽しめるよう、工作の材料を自由に使える「造形ワゴン」も用意した。

- ・白木の長方形積み木(2箱)
- ・木製の人形や木など、情景を表す積み木
- ・さまざまな形にラミネートした画用紙
- ・木製造形ブロック(3箱)
- ・アクリル積み木
- ・アーチ型の虹色積み木
- ・半月型の積み木
- ・虹色で大きさの異なる長方形の板
- ・造形ワゴン(工作の材料などを収納し、子どもたちが自由に使えるもの)

4. 探究活動の実践

<活動の内容>

初めの頃は積み木に興味のある子どもたちが少人数でドミノやビー玉転がし、タワー作りを行っていた。さまざまな形にラミネートされた画用紙を用意すると、街や家などの情景に見立て想像を膨らませる姿が見られ、ブロックや自作の人形を組み合わせて遊ぶ子どもも増加した。さらに、造形ワゴンに入った工作の材料を自由に使うことで、積み木だけでなく、紙や布、画材など多様な素材を組み合わせて表現の幅が広がり、ごっこ遊びの中でより豊かな世界観を作り出すようになった。新たな積み木を順次導入することで、単なるタワーやドミノだけでなく、ごっこ遊びのなかで積み木を用いて遊びのイメージを表現するようになった。

<活動中の子供の姿・声、子供同士や保育者との関わり>

木製造形ブロックで機関車を作る子どもがいたことをきっかけに、同じものをもう一つ作ろうとする子どもや、線路を作る子ども、隣の家と道を繋げようとする子どもなど、子ども同士の発想で遊びが次々と広がっていく様子が見られた。保育者は作業スペースの確保や、作品を取っておいてもよいことを伝えるなど、子どもたちが自由に創造できる環境を見守った。また、「明日は〇〇を作ろう」と友達と話し合う姿も頻繁に見られた。



5. 振り返り

<振り返りによって得た先生の気づき>

積み木には決まった遊び方がないため、子どもたちの自由な発想を存分に引き出すのに非常に適していると感じた。そのためには、子どもがわくわくするような積み木の種類や量、そしてじっくり遊べる十分な時間が必要であることを改めて認識した。また、木の感触や匂い、音などが心地よく、何か目的を持って作ることも良いが、ただ手に取って触れているだけでも心が安らぎ、リラックスして思うままに楽しむ時間も重要だと感じた。完成品だけに注目するのではなく、楽しみながら作る過程や、気の置ける友達と関わりながら組み立てていく満足感に寄り添うことが、保育者として必要な視点であると考えた。積み木をテーマに、子どもたちの発見や試行錯誤を見守ることができたことは、大変良い経験となった。

